

ジュール・ルナール全集

13

日記Ⅲ

ジュール・ルナール全集

13

日記Ⅲ



工業学院図書館
蔵書章

打田素之・柏木隆雄
谷征生・松田和之

訳

*訳者略歴

打田素之（うちだ もとゆき）

1957年 三重県鈴鹿市生まれ。

愛知県立大学外国語学部卒業。大阪大学大学院博士課程修了。

現在追手門学院大学他非常勤講師。

フランス文学、映像論専攻。

柏木隆雄（かしわぎ たかお）

1944年 三重県松阪市生まれ。

大阪大学文学部卒業。同大学大学院博士課程修了。

バリ第Ⅶ大学第Ⅲ期課程博士。神戸女学院大学文学部助教授

を経て、現在大阪大学文学部教授。フランス文学専攻。

小谷征生（こたに ゆきお）

1954年 和歌山県和歌山市生まれ。

大阪外国語大学卒業。大阪大学大学院博士課程修了。

現在甲南大学非常勤講師。フランス文学専攻。

松田和之（まつだ かずゆき）

1961年 香川県高松市生まれ。

大阪大学文学部卒業。同大学大学院博士課程修了。

現在福井大学教育学部助教授。フランス文学専攻。

『ジュール・ルナール全集』第十三巻
(全16巻)

一九九七年七月五日 印刷
一九九七年七月二十日 発行

編 者 柏木 隆雄

訳 者 打田 素之

発行者 小谷 征生

製 本 片岡 英三

606 京都市左京区今出川通川端東入ル

発 行 所 株式会社 臨川書店

電話(075)721-7111
郵便振替 京都0060-2188

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価は函に表示しております

ISBN4-653-02791-9
(ISBN4-653-02778-1 セット)

R <日本複写権センター委託出版物・特別扱い>

○本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

○本書は、日本複写権センターへの特別委託出版物ですので、包括許諾の対象になっていません。

○本書を複写される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)を通してその都度当社の許諾を得てください。

日記
Ⅲ
(一八九九—一九〇二)

打田素之
柏木隆雄
小谷征生
松田和之
訳

翻訳の分担は以下の通り。

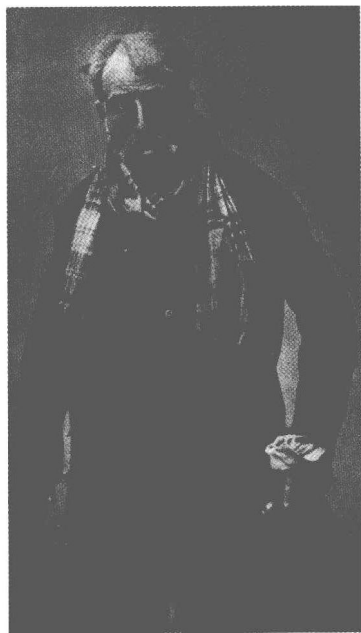
「一八九九年」「一九〇〇年」松田和之、「一九〇一年」打田素之、
「一九〇二年」小谷征生。

本巻全体にわたって柏木隆雄が統一をとった。

Journal
1899-1902

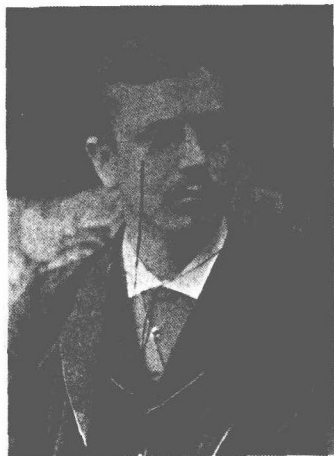
にんじん役を演じるシュザンヌ・デブレ

クルトリーヌ

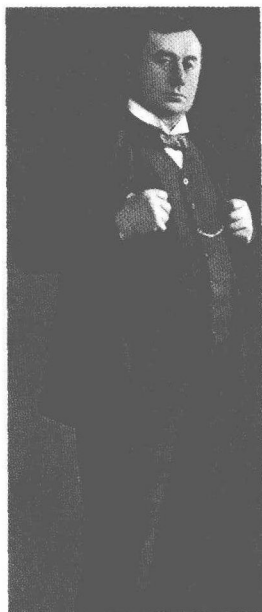


『居酒屋』のクーボー役を演じるリュシアン・ギトリー

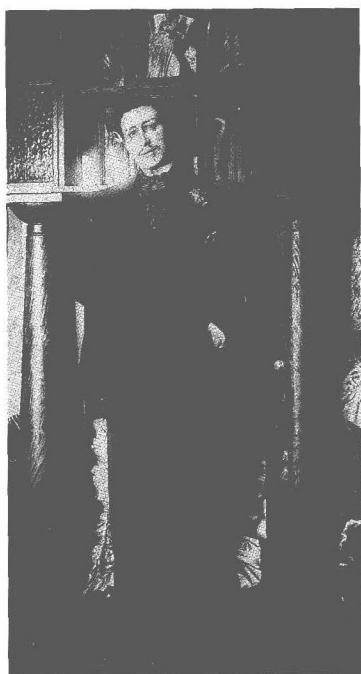
トリストアン・ベルナール



レオン・エニック



アントワープ



レオン・ブルム



ジャン・ジョレス

ジュール・ルナール全集 第13巻 目次

一八九九年		1
一九〇〇年		65
一九〇一年		155
一九〇二年		261
	* *	
	* *	
『ジュール・ルナール全集』編集にあたって		362
注		363

一八九九年（三十五歲）

一月一日

ラ・グロリエットにて。起床時に今年は古い習慣をできるだけ断とうと誓いながら、昼食には、いの一番に栗の詰め物をした驚鳥のローストとガレット・ド・ブロン¹を平らげてしまう。

農家の物語といえ、ウェルギリウスが書き残してはいるけれど、思うに、まだまだネタは尽きないのではないか。

一月二日

月明かり。水は生真面目な表情。つんと取り澄まし、唇をきつと結んでいる。凍っているのだ。まるでよく磨かれた鏡のよう。小川はその両岸で月をぎゅっとはさんで捕まえるようにしていた。

鶺鴒^{げん}たちが水草の根元に隠れて鳴いている。月をついばむ準備は万端。

月は小川を手助けするように、水面にありったけの冷気を注いでいた。

さあ捕まるぞ！ 鼠たちもかじろうと駆け寄ってきた。捕まえられないはずがない。月はいつものようにやすやすと身をかわし、どんよりとした水面があとに残される。

ペンで描かれた冬の木々。マロニエの木が、そこ、ここに銃剣を掲げている。柳はつやのない髪を振り乱している。

フィリップ一家。彼らは戸締りを忘れる。いくら薪をくべても、暖炉は彼らを暖めはしない。彼らは誰にも会わないし、誰の言葉にも耳を傾けない。物乞いたちが呼び鈴を鳴らしたり、戸をたたくことすら、もはやない。

——こんなに寒いんじゃ——とフィリップは言う——それにやつらはおれたちよりも金持ちなんだよ。冬の間はお屋敷に引きこもっていられるんだ。

そう、物乞いたちはフィリップよりも金持ちなのだ。

そんなフィリップ一家にもかつて一度だけ大騒動があった。彼らは眠っていた。突然、何かが爆発したような大きな音がして、彼らは目を覚ました。折よく部屋は月の光に照らされて、まるで^{せが}燐殻でも燃やしているかのように明るかった。彼らはベッドの上に座り込んだまま顔を見合わせた。その顔は月の光と恐怖で真っ青だった。

いったい何事が起こったのか、彼らは長い時間あれこれ意見を交わしたが、確かめにゆく勇氣はなかった。柱時計の振り子が動いていないのに最初に気づいたのは奥さんの方だった。彼女はそれに気づくとますます怖くなった。フィリップが勇氣を出して裸足のまま立ち上がった。一件落着。

柱時計の分銅のひとつが、吊りひもが切れたために大砲でもぶっ放したかのような轟音とともに落下し、家ごとぐらつかせたのだった。フィリップが分銅を付けたおそうとしたが、奥さんは彼に言った。

——無理に今やらなくなったって！ 明日になさいな。二人は寝なおすことになるが、その前にひとしきり大笑いし、狂った時計相手に何度も何度も捨てぜりふを吐いた。

——この野郎！ おかげで肝を冷やしたじゃないか。

水が氷をしゃぶる。さながら透明な唇。

娯楽は私を楽しませない。

この村を構成するさまざまなベクトルの和でありたいものだ。

生け簀。氷のかけらが背中を出して、魚のように泳いでいる。

元旦には、わずかばかりの黒すり酒を振る舞い合う。

彼女は父親の喪に服している。父親は彼女の家で死んだのだった。彼女はそれを口実に家では火をおこさない。そして、事あるごとに隣近所に押しかけては火にあたらせてもらう。ひとりでじっと寒さをしのぐのは耐えがたい、と彼女は言う。それはさも当然と思われて、皆がストーブのそばに彼女の席を確保してやる。

私は生まれながらの村長なのだ。

いぐさの葉が立てる衣ずれの音。

羊の群れを束ねる羊飼いの姿には、村にそびえる教会

を連想させるものがある。

暖炉。上からやけに風が吹き込んでくるので、火を消すまいと手をかざしてみた。手のひらは火傷寸前、手の甲は凍傷寸前。

そうだ！ われわれの田舎に植民政策をとってみたら。

——何か変わったことはないかい。

——あるわけじゃないでしょう——とフィリップは言う
——このど田舎にどんな変わったことがあるっていうんです。

——誰かが死んだとか。

——いいや。たとえ誰か死んでも、みんなすぐに忘れてけろっとしてますよ。

一月五日

「酒瓶の中で酒の魂が歌っていた」(ボードレール)
存在するものに目を向けず、存在しないものを描くことに心を砕いている、こんなものは本当の詩ではない。酒

の魂や瓶の魂よりも瓶のなかの酒の方がより真実味があり、そこにこそ芸術家の創作欲をかき立てる何かがあるはずだ。魂などなくてもなんの差し障りもない対象にわざわざ魂を付与してやる理由はないのだ。

トルストイならデルレード³に向かってこう言うだろう。「あなたのような人間がいるかぎり、戦争はなくならないでしょう」

一月六日

花束よりも一輪の花。

彼女は英語よりも二日前に習い始めたドイツ語が好き。文字がきれいだから。

ブルターニュ風のカーディガンの上に赤の上着を羽織っている。絶えず上下する落ち着きのない眼差し。少女らしさがちっとも感じられないので、彼女に接する者は、会話の途中でふと、大人の女性に対するような口調で話している自分に気がつく。熟れた女の赤い唇、摘み取るなら今だ。笑顔はまだ子供っぽい。

れない数々の夢想。

みずみずしい髪。つかの間の無邪気さ。思わせぶりなしぐさの数々、そのぎこちなさはいずれ恋愛を経験することで解消されるだろう。

大きな眼。森の中の、深い草むらに取り残された迷子みたい。

——ああ！——私は言う——ああいう一人前の娘が自分のものになればなあ。

——嬉しいよ、そう言ってくれて——と彼は言う——あれもだんだん娘らしくなってきた。

いやはや、彼は私の言葉を見事に取り違えてくれた。

人は皆、胸の中に鳴りやむことを知らない手回しオルガン^{オルグ・ド・バルガン}を抱えている。

一月七日

同義語^{シノニム}があるのではない。必要な言葉があるだけだ。

優れた作家は必要な言葉を知っている。

——何を書くこうとしているんだい。

——短い文章を二つ、三つ。それにいつ果てるとも知

ラ・フォンテーヌ。動物をひとつひとつ描写する際の彼の筆に狂いはないが、彼が描く動物たち相互の關係は偽りに満ちている。鯉は、老婆の曲がった背中にも似たその形から、確かに口さがないおばさんを連想させる。だが、その相棒のカマスといっしょに泳ぎ戯れるという設定はうなずけない。鯉にしてみればカマスは不倶戴天の敵なのだから。

バレスという男は、まるでフルートを吹くかのように、理性を奏でる。

王は『歴史』という名の定期刊行物の特大号だ。

鈴の音を聴きたまえ。乗合馬車が来るよ。鍵束をガチャガチャいわせながら時間どおりにやって来るふとつちよの家政婦みたい。

私はね、ご承知のとおり、作者が作品よりも劣ってい

ようがいまいが、いっこうに気にしないたちでね。

猫に思考力がないのは確かだ。にもかかわらず、猫と
いうやつは思慮深そうな表情をみせる。

薄暗い部屋の中に差し込む一条の日の光をじっと見る。
ほこりで一杯だ。日の光ほど汚れが目立つものはない。

諸君、私の情報が正しいとすれば、祖国は危機に瀕し
ていますぞ。

エミール・ブヴィヨン。『セゼット』。彼は故郷を愛
し、その情景を見事に描き出す。しかしそこに暮らす農
民を描くのは、風景を描くほど容易なことではない。彼
が描く羊飼いの男女の姿は正確さを欠いている。牛飼
いと言う。「実にうまいよ、このサフランのスープ、こっ
てりしていて、精がつきそうだ。なんて「まろやか」な
んだ」これも彼の言葉。「ヴィエール弾きなんていら
ないね。おれたちの喉さえありや、足がくたくたになる
まで踊れるさ」

一月十五日

たえず私は自らの手でダモクレスの剣をつるす馬の毛
を切る。剣が私の心臓を貫く。

——彼の名は、本当にデスパルベスだと思えますか。
確かに、デスパルベスとは彼のことです。相も変わらず
彼はトマの代わりにデスパルベスを名乗っている。そし
て人生の代わりに伝説を生きているのです。

私は作家だ。完全であろうとすることだけが、私が大
作家になるのを妨げる。

私はもうフランス文学の撰集しか読まない。ただ、で
きれば私自身の手でその選に当たりたかった。

スペイン人は子供の頃に着た小さなベストにこだわり、
生涯着続けようとする。丈が短くなったとみるや、すぐ
さま帯を縫い足すのである。

一月十六日

『赤い百合』を上演しようとしているアナトール・フランスは、ギトリーの足もとで、まるで子供のように小さくなっている。彼はさまざまなお世辞を案出する。たとえば、私は君の芸術に対する理解の仕方に惚れたんだ、とか、君が朗読するのを聞くだけで成功を確信できるよ、とか。

——実に喜ばしいことです——と私はアナトール・フランスに言う——芝居の虜とりこになったあなたの姿を拝見するのは。

とにかく彼は愛想のいい男だ。たとえ温かく迎え入れてもらえなくても、めげることなく戸口から顔をのぞかせている、そういう男なのである。

一月二十二日

劇の初日、劇場は自分で自分の楽しみを台なしにしてしまふ不器用な人々でいっぱいになる。

二月

ベルナールが私をフォリー・ベルジェール9に連れてゆく。舞台を練り歩き、飛び跳ねては身体中で美を表現するあの娘たちの一団は、観る者に、彼女たちの人生となんらかの係わりを持つ別の人生を夢見させる。シネマトグラフの銀幕の上では、数個連隊が「ラ・マルセイエーズ」の歌に合わせて行進している。馬たちが舞台裏で足を踏み鳴らしている。そして観る者は、この軍隊となんらかの係わりを持つ別の人生を夢見るのである。

二月九日

女というやつは、容姿を褒められただけで、たちどころに自分が才色兼備だと思い込んでしまう。

二月十一日

あの連中は、ある本を褒めるのに独特の言い回しを用いる。「これは製本に出すべきですよ」¹⁰

——あなたのリリースムはね、マンデス、地面に落下しない気球のようなものですよ。落下しないのもそのは

ず、そもそも浮上していないのだから。

雪。白粉おしろいをつけた田野。王宮にさま変わりした田野。

夜中に何度も雄鶏の鳴き声を聞いたように思う。翌朝、フィリップに聞いたかどうか尋ねてみる。彼は聞かなかったと言う。私は当惑する。

到着してからまる一日、墓地の白壁を目にするまでは、父のことを考えなかった。

言葉は観念と闘わなければならない、足払いなど使わずに真っ向から。

もし私が六階に住んでいたら、私の文字はおそらくもっと陽気なものになっていただろう。

アルザスの民俗衣装をまとった蛾。

農民を描くの、彼らが理解できないような言葉を使っ

てはならない。

ファンテクは母親に、「鎧戸を開けて」と言う代わりに「明かりをつけて」と言う。

私の不機嫌は、放っておくとどんどんふくらんで、ついには怒りとなって爆発する。賢明なマリネットは、ふくらみ始めた私の不機嫌にちくりと穴をあけてつぶしてしまう。

たびたびペンの型を変える。すると筆跡が変わる。そしておそろく、わずかではあるが文体も。

口もとにほくろがひとつ、蝮まじの卵のように。

革帽子フォルツンをかぶった荷役人夫のような茸きのこ。

流行は善意に基づく。だから長続きしない。

私は誰かに導かれている、そんな気がする。